

Digest of Science of Labour
労働の科学

February

2 0 2 5

Vol. 80, No. 2



レオナルドの多面体(Ⅲ)／本城義雄

特集

魅力の図書館探訪①

石川県立図書館 人生の1頁をめくることができる場所

巻頭言

農に生きる
高原久美

特別寄稿

児童養護施設の労働問題

堀場純矢

連載

労研アーカイブを読む⑩

椎名和仁

軽労働化で農業の再生⑧

宇土 博

凡夫の安全衛生論議⑨

福成雄三

銀行と労働④

坂本恒夫

タイプライターの歴史とタイピスト⑭

三宅章介

ILOインド南アジア産業安全保健通信②6

川上 剛

労働の科学

February
2025
Vol. 80, No. 2

巻頭言

俯瞰（ふかん）

農に生きる

高原 久美 [徳島県板野町高原農園]

1

表紙作品：レオナルドの多面体（Ⅲ）／本城義雄

制作年：1989年

サイズ：1303×1620mm

材質：油彩・キャンパス

出品：第63回国展

表紙デザイン：大西文子



魅力の図書館探訪①

人生の1頁をめくることができる場所

編集部 4

Special contribution

特別寄稿（1）

児童養護施設の労働問題

—労働組合の有無別の調査から

..... [日本福祉大学社会福祉学部教授] 堀場 純矢 8

Series

〈シリーズ〉日本スポーツ健康科学学会における職域の熱中症予防の取り組み（9）
熱中症予防指導士としてメーカーとユーザーをつなぐ架け橋に

..... 下村 寿邦 14

ILOインド南アジア産業安全保健通信（26）

アフガニスタンにおけるオンライン中小企業支援ワークショップ

..... 川上 剛 16

「#教師のバトン」で伝わる（40）

教職員の過酷な勤務環境

..... 藤川 伸治 19

Series

軽労働化で農業の再生 (8) 農業における運搬作業の軽減対策 各論第7回	宇土 博	23
タイプライターの歴史とタイピスト (14) —戦前におけるタイピストの養成と労働問題—	三宅 章介	33

Column

つれづれなるままに 「コメ」について考える—最近のニュースから	千葉 百子	47
銀行と労働 (4) メガバンク、暴力団融資事件	坂本 恒夫	50
凡夫の安全衛生論議〔疑問と思い込み〕 (9) メンタルヘルス問題について考える② ～ストレスチェック制度の効果検証～	福成 雄三	52
労研アーカイブを読む (108) 地域保健の実践者、小宮山新一 その1「保健婦読本」について	椎名 和仁	54
BOOKS 『あらゆることは今起こる』 当事者からの景色を通して考える、他者への理解	矢野 功二	62
『どうする!? 職場のアルコール問題対策 予防・対応・リワーク支援』 職場のアルコール問題を「個人の問題」で終わらせない —— 組織的対策実践の手引き	西浦 千尋	63
『困りごと解決のための産業医実務Q&A』 実務に悩んだ時の頼りになる道しるべ	長濱 さつ絵	64
『東京大空襲を指揮した男 カーティス・ルメイ』 平和について考える	椎名 和仁	65
労働科学のページ		66
ろうけん川柳		67
次号予定・編集雑記		68



農に生きる

戦後80年という節目の年に、さまざまに思いが去来する。

夏休みを終えた子ども達が学校へと帰っていき、これでやつと安心して食事がありつけるといふ小さな声が聞こえてくる。夏休みは子どもたちにとって楽しいことがあふれる時間である一方、家庭で満足に食事ができない子どもたちを無数に生み出してしまふ。

80年前、ひもじさを我慢でぎずに、昨日まで敵国だった米兵に食べ物をねだった子ども達がいた。80年という歳月が流れた今も、十分に食べることができない子どもたちが日本のあちこちで我慢を強いられいている。このような日本になると、誰が想像しただろう。

世界に誇る豊かな水源をもち、山間にも田畑が耕され、瑞穂の国と誇ってきた日本で、腹をすかした子ども達があふれるようになる、誰が想像しただろう。

今、食卓から日本産のお米が消えようとしている。日本中のあちこちで刈り入れが始まり、新米はもうすぐできるのに私たちの食卓にはなかなか届かない。まるで歴史の歯車が戻されたように、アメリカの食糧が我が物顔に私たちの食卓に載る日が近づいている。

私は他県で教員の職を得たため、長い間郷里を離れていたが、故郷高知を思い出す農村の風景はいつも変わらずにそこにあつた。しかし、定年前に退職し郷里に戻ってから、郷里の農村風景は急速に変わっていった。

かつて、村のコミュニケーションは、良きにつけ悪しきにつけ、確固たるものがあり、それこそ農民たちが季節ごとの生業を通して育んできたものだつた。夏の精霊送り、秋の村祭りなど、事あるごとに村の衆は集い、豊穡と家族の健康、一家の繁栄を願ってきた。農作業を通して培ってきた連帯は農耕民族の誇りでもあつた。

ところが、時代の流れの中で「農」を離れる人が増え、それに伴い消え去つた村が日本中のあちこちにでき始めている。もちろん、今年も日本中のあちこちで新米が生産されているが、その一方で、洪水によつて全滅した田んぼを見つめるだけの人がいる。あるいは干ばつで干上がった田んぼの地割れをただじつと見つめる人がいる。米よりも育つた雑草を前に手をこまねいている人が、異常気象を前にすすすべもなく首を垂れてうずくまっている。



たかはらくみ
徳島県板野町高原農園

高原 久美

連日報道される農業の現実をみるにつけ、「ノアの箱舟」は、まんざら嘘ではないかもしれないと思わされる。人間の究極の、欲望の果てにたどり着く自然破壊の結果だと考えると、なんだか妙に納得する。行き着く先がここなのかもしれない。人類生存の象徴にさえ思える。

私は、今年もますますひどくなる酷暑の中で、高く伸びた草を刈りながら、地面や自然と対峙し、時には哲学者にもなる。農業とはそのような営みである。

手塩にかけてきたものが一瞬のうちに破壊され、奪われることが繰り返される。だから、今日も酷暑の中で、育つ作物を守るために、自然との闘いを繰り返している。